

## 審査の結果の要旨

氏名 星野 裕司

近年、従来の構図的な捉え方（絵のような風景）とは異なる新しい風景論が求められはじめている。人は景観に対し時、そこで体験されるであろう出来事をイメージし、それを通じて景観の解釈・受容・操作を行うことが一般的であり、これらは仮想行動として知られる考え方である。この概念を創出した中村良夫は、そこへ踏み込む私たちの身体の痕跡が刻まれた棲みごちの風景（「参加の美学（Aesthetics of engagement）」）の重要性を説いている。本論の視点も同様であり、この「参加の美学」に基づくモデルを「状況景観モデル」として構築したものである。状況とは、自己や他者、あるいはそれらを囲む地形が様々な関係を結ぶものであり、このモデルは自己と他者との関係を通じて、地形の解釈としての景観を把握するモデルとなる。第一章では、上記の内容を論文の背景として述べている。

第二章では、状況景観モデルに必要な考え方や視点を整理している。まず、このような視点が、既存の景観論の中にも内包されていることを示したことは、景観研究史という側面からも優れた成果である。そのような準備に基づき、既存の景観論でも良く参照される「眺望 - 隠れ家」理論や「アフォーダンス」理論、「プロクセミックス」理論を検討した。それらから明らかになったことは、状況景観モデルにおいて注意する必要がある項目は、自己の存在形式（移動あるいは遍在）、他者の属性（敵か友か）、自己と他者の関係、などである。このような視点から様々な理論を照査した研究は他になく、高く評価できるものである。

第三章では、軍事という視点から地形について考察している。軍事的な環境把握において留意されるのは、敵がどの様に動き、それにどの様に対処すればよいかという点であり、軍事的な事象への観察者の想像力が鍵となる。これは、クラウゼヴィッツが『戦争論』において提起した「地形感覚」という概念である。本論文ではこの概念について、森林太郎の「地形観」という最初の邦訳まで遡及し検討を行うことで、環境（「地」）に状況（「形」）を「観」という、まさに状況景観的な概念であるということを示している。

本論文で分析対象とする沿岸要塞は、推奨土木遺産にも選ばれているように我が国の社会基盤整備において重要な施設である。しかし、要塞や砲台の設計思想まで踏み込んだ土木史研究はない。そこで第四章では、主に昭和18年までの資料を陸軍築城部本部が編纂した『現代本邦築城史』を資料として分析することで、当時の計画・設計思想を検討してい

る。まず資料中の主要な言説を押さえ、次に要塞予定地の変遷を見ることで大局的な地形の解釈や政治的配慮を確認し、最後に幕末から砲台が多数設置されている下関要塞を対象として局地的な分析を試みている。ここで明らかにされた要塞・砲台の地形的条件や設計思想は、いままで知られていなかったものであり、土木史研究として価値の高い成果である。

第五章では、第二章で整理した状況景観モデルを沿岸要塞を通じて部分的に検証し、モデルの精緻化を行っている。対象は、函館・東京湾・舞鶴・由良・鳴門・芸予・広島湾・下関・佐世保・長崎・対馬の11要塞、124砲台である。沿岸要塞では、状況景観モデルをシンプルに捉えることができる。すなわち、まずモデルの最小単位として、景観を中心とした地形・砲台・敵の3者の関係があり、そのユニットがいくつか組み合わせることによって要塞モデルが構築される。このような整理から、沿岸要塞を砲台の位置、性能、地形の中の他者認識といった視点から砲台のネットワークを分析している。このように、一般的には複雑な機構を有する状況景観というものを、軍事要塞を経由することで単純に検証できたことは、本論文の特筆すべき成果であると言える。

第六章では、前四章の成果に基づいて、状況景観モデルを構築している。要塞の分析を通じて理解できることは、状況景観モデルとは、「自己」が「地形」を「他者」や「状況」に基づいて、どのように組織化するかということではないかということである。この組織化とは、ニュートラルな地形あるいは他者の領域としての地形（他者領域）を、自己にとって意味のある（有利な）地形として領域化（自己領域化）するものである。そのような理解に基づき、状況景観モデルを、「自己」「他者」「地形」を構成要素として、静的な単位モデルと動的な遷移モデルとして記述されるものとしてまとめた。その遷移モデルは、並列相、融合相、包摂相、距離相の4つの位相を持ち、自己領域および他者領域が関係を変えることによってそれらは遷移する。この状況景観モデルは、要塞構築だけではなく、ピカソのキュビズムや第2章で検討した景観論や基礎理論を包含するものであるため、景観論の原論的知見を発展するものとして非常に有効なものである。

以上概観したようにしたように、本研究の最も評価すべき点は、状況景観という概念を提示し、いままで深く追求されてこなかった景観原論的課題を追求し、明治期の沿岸要塞という特異ではあるが本質的な素材を分析することによって困難な課題に新しい展望を開いた点にある。よって本論文は博士（工学）の学位請求論文として合格と認められる。